界に沒入する。さうして自我が無限に擴大される。肉の不死を求める時には、特殊的人格の世界に留る。茲には個人の不朽がある自我が無限に延長される。靈肉一つの意味に合してこそ、普遍的人格が特殊的人格に、或は、後者が前者に實現される。肉の無限の延長と靈の無限の擴大が合して、愛に無邊、無限無碍の世界即ち宇宙我の世界を現出する。此の境に進み行く道の背景を爲すものは、無限の長さと廣さに擴大し行く自然の生命である。この生命に浸るのが文學的生活である。この生命を人の世に振り撒くのが其働きである。この生命に生きるものが文學的の我即宇宙我である。夫れが個人の不朽の生命の中に實現せらる故に衆多の入るを許さない貴族的のものとなる。個人に現れる文學は特殊に於ける絶對である。自己實現である。—之れが第二講の要領である。

其說の學的內容そのものは、必ずしも特に新意あるものでなく且又、—たとへば—藝術至上主義と人道主義との關係に著者の所謂遊樂の緊張と緊張の緊張との關係、藝術至上主義と神秘主義との關係、所謂神秘主義の意味、所謂自我の延長と擴大との對比など、もう一つ深く考へ貫かなければ、自分には滿足出來ないが然し、極めて突入つた文學の理解に本いた、强き統一ある美的人格を逆る如く表して撥剌たる生命に充ちた、張り切つた思想を發現してゐる點に於て、自分は此書を得易からざる著書の一つであると思ふ。確實に、著者は自己獨特のものを投げ出してゐると確信する。東京日本橋區本石町、寶文館發行。定價壹圓六十錢。(植田壽藏)

大藏經要義（卷七）

本多日生著

大藏經要義なる叢書が出でし事は以前より余の聞きし處なるも之を初めて手にせるは第七卷目のそれなり、故にこの一卷に依て得たる所感批評を以てその體に臨むは穩當にあらず、只本卷のみに止め少しく余の思ふ所を述べんとす、されど元來本叢書全體が略ほ同一形式の下に發行されつゝありとすればこの一卷の批評に依て自然多少はその全體にまで及ぼす事を得と見られざるにもあらず。さて本叢書の目的とする處に依れば言ふまでもなく東洋文明の最高權威たる大藏經中より重要なる經典約一千餘卷を選出し、その組織と綱要とを簡明平易に講述し、且つ要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義、深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて、一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとするにあり。抑も我國文明の一大根底とも謂ふべき佛教が從來廣く一般人の以て難解難入とし顧る處なかりし所以のものは一にその典籍の浩瀚とその內容の難澁なるに起因せすんばあらず、八萬四千の奧藏之を理解し之を闡明せんとするに當り誰あつて望洋の嘆を發せざるものぞ、この時に際して大藏經要義出づ、實に渡るに船、暗に燈を得たるの感あり、然も同時に又事實その船たりその燈たるの義務と責任とを果すべき重大なる任務を帶べるものと謂はざるべからず、借問す本叢書果して然るや否や。

本卷收むる處雜阿含經、佛本行集經、佛傳關係の諸經、小乘部

諸經、及び四十二章經。

今之を見るに(A)雜阿含に就ては(一)初めに先づ姉崎博士研究の結果に從ひ經品の順序を改訂し梗概を述べ、(二)次に種々の要文を摘出してその一段毎に簡單なる解釋を施し、(三)最後に重譯諸經の對照を擧げ、(B)佛本行集經に就ては(一)前經と同じく梗概を述べ(二)更に梗概的に要文を記述し、(C)次に佛傳關係の諸經六部を選びてその內容の一端を示し、(D)次には小乘部諸經約百六十部の解題紹介をなし、(E)最後に四十二章經の譯者に就て記述し、本經全文を揭げて各章の終に簡單に著者の所感的解釋加へらる。而してその摘出されたる要文が悉く訓譯なるを以て從來支那譯そのまゝの難解なるに比し一般人に取りて多少便利なるものなる事は疑ふべからずと雖も、しかも布盤に謂へば寧ろ一般布敎師用說法話材集といはん方恰好の觀ある事爭ふべからざるが如し。

若し本叢書が專ら一般人相手のものなりとすれば各要文に對する解釋は餘りに結論的であり、餘りに簡單ならずやと思はる、一般人の望む處は恐らくその要文に用ひられたる言語字句の解釋なるべし、若しその言語字句が忠實にしかも親切に解釋せられなば、別に本卷に於ける如く一々著者の簡單なる結論的な解釋を附せずとするも、その本叢書の目的は概ね該要文の訓譯のみに依て却て公正に達せらるべしと信ず。

而して元來要義と稱する以上本卷要文の各節が原本に於ける各節中處々前後の切繼たるは止むを得ずとするも、今少しく前後の關係を明にする程度に於て拔粹し、たとへその前後の要文を訓譯せずとするもその前後關係の梗概を紹介し置くの必要なきか。

若し本叢書の一目的として醇乎たる宗敎的妙旨を闡明するてふ事ありとすれば、一般人に對し新たに疑惑の念を懷かしめ、しかも之に何等の解決を與へざるが如き要文は省略する方可ならずや勿論宗敎それ自身より見れば別に顧みるの要なしとせんも、佛敎に對する一般人の信仰上許すべからざる事にあらざるか、若しかゝる要文を記述するの要あらば之に對し相當なる解決の鍵を與ふる事は佛敎學者乃至佛敎徒の責務にあらざるなきか一例を擧げん、雜阿含經最後の處佛の經歷を述ぶる偈に「始め年二十九出家して善道を修し云々」(一四五頁)即ちこれ也、一般人の信仰なる十九出家說との關係に就てたとへ獨斷的解決方法たりとも何等か說明し置くの必要あらざるか。若し本叢書がかゝる問題には觸れず全然研究と沒交涉のものなりとせば本卷雜阿含經に於ける經品順序の改訂或は重譯經の對照等は當然省略せらるべき性質のものにあらざるか。

支那譯本を訓譯する事は一面大に我國人に取り重要にして利益ある事論ずるの要なきも、他面十分なる考慮を拂ふにあらずんば大に原意を損ね、誤解謬論の結果に到達するの恐なしとせず、訓譯の事業易の如くにしてその實難なる事識者の認むる處、今本卷雜阿含經の訓譯要文に就て少しく之を例證せんか、今本卷を見るに、(a)「譬へば士夫の如し、刈つて茇草を拔き手に其の莖を執り空中にして抖擻其の亂穢を除かん、我れも亦是の如し云々」(二五頁)、(b)「譬へば士夫の如し、斧を持して山に入り、芭蕉樹を見て用材に堪えたりと謂ひ……剝いで盡くるに至るも都べて堅處無し、是の如く云々」(三四頁)、(c)「二受を增長す若は身受若は心受

なり、譬へば士夫の身の如し、雙の毒箭を被り極めて苦痛を生ず、愚癡無聞の凡夫も亦復是の如し」(五一頁)等とあるを見る、由是觀之、著者の見たる士夫とは(a)「刈つて茇草を拔き……除く者」か、或は(b)「斧を持て……堅處無き者」か或は(c)「二受を增長す……心受なり」か或は「雙の毒箭……生ずる者　等の諸義ならざるべからず、尠くともその中何れかの一と解釋せざるを得ざるなり、士夫とは果して是の如く奇怪千萬なる定義を與へずんば解釋し得られざるものなるか、今一歩を讓りてそれ等の義の中何れかを以て士夫の定義とせんに、「淸淨信樂の心を士夫の勝財と名く」(一一七頁)の士夫は果してその何れの士夫なるか、著者はその解釋の文に於て「士夫の勝財は世寶にあらずして云々」となせり抑も士夫とは何物ぞ、著者自身に於ては勿論知悉せらるゝならんも、之に正當にして忠實なる解釋を與へられざるに於ては多少無責任の嫌あるにあらざるか。士夫といふが如き簡單なる語に對し是の如く論じ立つる事は余の欲する處にあらざるも、その玆に至りし原因は一に著者の訓譯方法の誤れるに存す、余淺學なりと雖も(a)は「譬へば士夫刈つて……除かんが如く云々」、(b)も亦同前(c)は、「二受……心受なり、譬へば士夫の身雙の毒箭……生ずるが如く云々」と譯すべきものなることを知る、而して士夫とは「人」の意なる事佛典常に用ふる所也、かくして初めて士夫なる語に對し隨時隨處正當なる解釋が得らるべしと信ず、勿論著者もかくの如き意ならんも、本卷所譯の文にては日本文法上解釋し易からず。又「是の如きの衆生」(七頁)は「是の如く、衆生」と譯せざれば原意を失し、「如來は色已に盡き、心に善く解脫したまへり」(一二九頁)は「如來は色已に盡き、心善く解脫したまへり」の誤譯にあらざるか。その他略す。

要するに本卷は未だ如上本叢書の目的を達し、その責任を盡したるものと謂ふを得ざるを憾む、他の卷に於て或は大なる效果顯はれしや之を知らずと雖も、本卷に依り余の希望を述ぶれば、尙大に細密なる注意と、深遠なる責任とを要し、一般世人の要求をも尙深く顧慮するの必要あるべしと信ず。然れども事業そのものに對しては余は雙手を擧げて贊意を表するもの也、(東京博文館發行、菊版四一五頁、定價壹圓八拾錢)(本田義英)

宗教研究　第二年第七號　宗教研究會編

先づ本欄には左の如き五氏の有益な研究發表が列載されてある。

一、初期基督教の美術に就て　文學士　濱田耕作
一、涅槃經論(續き)　文學博士　松本文三郎
一、神聖觀念論(續き)　文學士　赤松智城
一、于闐出土梵本法華經と妙本との關係　文學士　本田義英
一、梵文無量壽經批議(續き)　荻原雲來

濱田氏の所謂初期基督教の美術といふのは、最古の基督教的美術のある西曆一世紀の末から、ビザンツ式美術の發達した第六世紀の終り頃迄の、後に中世の基督教自身の美術となつて來た前身の、クラシク美術の一般に付て同氏が、親しく彼地曆遊の經驗を材料として、建築、彫刻、繪畫、等を希臘、羅馬、印度美術抔と比較して興味深く說明された者で、先づ古代建築の參考として唯一と